

第1章 学級経営よもやま話

第3節 家庭訪問

年度のはじめ(普通は4月か5月)に行う家庭訪問を、「定期の家庭訪問」とします。学校の“年中行事”になっていますが、教育的な意味合いはどこにあるのでしょうか。

予め日程を組んで実施する家庭訪問以外の「不定期的な家庭訪問」もあります。年間1、2回という学校もあれば、一人の教師が平均数十回という学校もあります。数十回の必要性と意義は何なのでしょう。

家庭訪問って何なのか、考えてみたいと思います。

この節は、

■「家庭訪問」入門■

■電話にたよるな■

の2つの項から成っています。

■「家庭訪問」入門■

雑誌『解放教育』1994年5月号に、「いま、家庭訪問のすすめ」という特集が組まれました。

冒頭、『部落問題事典』(1984.3刊)に掲載されている「家庭訪問」の項が紹介されています。

家庭訪問 かていほうもん

(前略)

地域や家庭で見せる子どもの素顔や生活者としての姿は、学校や教室で見せる顔や姿と異なっていることがしばしばあり、教師が驚かされたり見直さなければならぬことがよくある。家庭訪問をすることで、子どもの本当の姿が見えてき

て、教師の子どもを見る眼が少しずつ変わっていく。また、子どもの心が読めずわからなくなったとき、親に助けを乞いに行くときもある。その際、訪問する態度がいい加減であれば、当然回避か拒否の形で対応され、本音の対話は成立しない。教師の子どもへの迫り方が本物で、子どもとともに歩こうとしている姿勢が見えたとき、親たちも当然この渦の中に巻き込まれていき、自らの〈生きざま〉を話してくれる。そのとき教師は、親の過酷な労働や厳しい生活のなかで、したたかであくましくもあり、優しい姿に励まされる。親たちもまた教師の熱意に支えられ、相互が励まされながら、子どもをしっかりとさせていく道筋に一步進み出ていく。そのなかで教師は、子どもがどんな生育史を経てどんな思いで学校に来ているのか、親は子どもにどんな期待を寄せているのかを知り、子どもを支え励まし鍛えていくための鍵をもつかむことができる。このような意味から、家庭訪問のことを〈親に励まされに行く〉とか、〈親に叱られに行く〉ともいう。また、解放教育実践の思想としてある、〈20坪の教室の内と外を切り結ぶ〉〈教育と生活を結合させる〉取り組みの出発点であり、要でもある。

前掲書に、奈良県人権教育推進協議会会長の大寺和男さん(当時奈良県同和教育研究会事務局長)の1文が収められています。1年間の子どもや親との付き合いの中で、定期の家庭訪問の占める位置を確認しあいたいと思います。

忘れえぬ家庭訪問 玄 関

大寺 和男

私が教員になったのは、今から24年前である。高度経済成長の初期の段階で、世の中は活気があふれる状況にあった。今日ではどうてい考えられないが、教員採用は、広い広い門であった(給与が一般企業に比べてかなり低かったこともあるが)。教員養成大学を出た私は、一応教師になろうと思い、採用されたのであるが、教員志望の動機はきわめて不純なものであった。それは、夏休み、冬休みが存分にあり、大学時代山岳部に所属していた私にとって、これは大変な魅力であった(現実には、休みなどほとんどとれなかった)。当時、世間でよくいわれていた「教師にでも……、教師にしか……」という『デモ、シカ教師』の典型であった私が、そのあやまちを思い知らされるのも家庭訪問であった。

当時は、同和対策事業もまだ開始されておらず、昔ながらの部落の姿があった。4月末の定例の家庭訪問、村の家庭訪問は大変だ。一度や二度では、子どもたちの家にたどりつく道を覚えられない。必然、子どもに案内をたのむことになる。圭子さんの家を訪ねたおりのこと、良雄君の案内で圭子さんの家を訪ねる。子どもにとって村内の道はすべて頭の中にあるから、良雄君の家から圭子さんの家ま

での最短距離に行くことになる。その間には、よその家の裏庭も通り抜けていくのであるが、「こんにちは、小学校の大寺です」と声をかけ、圭子さんの家を訪ねる。お母さんが出てきて、私の顔を見るなり大笑いをされる。わけのわからない私は、ただただあ然とするのみである。話をしているうちによりやくその理由が飲みこめた。今日は、家庭訪問、学校の先生が家に来る。圭子さんのお母さんは、朝から内職のグローブの紐通しを休み、玄関に山積みされているグローブの材料をわざわざ裏口の方に移し、玄関から部屋からきれいに掃除をして、花を活け、座布団、お茶、茶菓子を準備して、今か今かと待っておられたのたそう。そこへ私は裏口、つまり、かたづけ物が山積みされている所から顔を出したというので、大笑いになったのである。一人で大笑いしたものである。帰ってからじっくりと考えてみた。これほどまでに教師に期待をよせる親がいる。子どもの教育にかける親がいる。「デモ・シカ」では絶対に許されないと痛感した。この圭子さんのお母さんとの一件は、今も私の教員生活の糧として大切に仕舞いこんでいる出来事である。

新任教師にとって、最初の家庭訪問は、学校行事としての定例の家庭訪問であろう。そこでどのような出会いを親たちとの間でしてくるのか、そのことが重要なポイントになろう。「部落の親たちと出会い、教育にかけるおもいや差別の現実を学びとってくる」といった大上段に構えた家庭訪問など、現実の問題として成り立たないだろう。もっと肩の力を抜いた所で、何度も何度も子どもの家を訪ねる、そこでの世間話の中に、教育の課題が沢山埋もれているのだと思う。「靴べらし」「足でかせぐ」といわれる所以だろう。

近年、気にかかる現象がある。「村へ足を運んでいる」ということの中身の問題である。確かに村へは行っている。しかし、そこは解放会館であったり児童館であったりする場合が多い。学校を取りまく社会状況や親の意識も大きく変化し、かつてのように気楽に子どもの家を訪ねて、遅くなれば夕食もご馳走になったというようなことが許されない現実もあるだろう。でも、真の家庭訪問とは、教師と親との立場を越えて、子どもの成長にかかわる一人の人間として語りあう関係の成立を言うのだと思う。そして、このことを同和教育は何よりも大切にしてきたのだと思うのである。

「定期の家庭訪問」は、親と話ができる関係を築けたらそれで良しと考えましょう。子どもの家庭環境や保護者の子育てのスタンスなどを感じ取ってくるのも大事ですが、それで完結ではなくて始まりの一步です。

■電話にたよるな■

失敗談はいくらでもあります。駆け出しの頃…。

当時、宿題の答え合わせをする時に席順に答えを言わせるのが通例で、私もそのようにしていました。算数の時間、A児は自分の番になるとふてぶてしく立ち上がって「やってません」。そんなことは1度や2度ではありません。腹に据えかねて、2巡目にはA児の指名を飛ばしました。

翌日、A児は学校を休みました。家に電話をすると、母親が「うちの子はいなくても一緒だから、学校へは行かせない」（こんな優しい言い方ではなかったですが）と言うのです。「ちょっと待って、これから行きますから」と言って、早速家庭訪問です。さんざん言われて、一言の弁明もせずに帰りました。

次の日も家庭訪問をしたけれど埒があかず、最後は校長が同伴して「私に免じて…」と謝ってくれて、やっと登校するに至りました。

私の答え合わせの拙さは置くとして、こうしたちょっとしんどい“授業料”を幾度か払い、得たものもあります。言葉の強さや激しさは表面のことで、最後に言いたいことは「うちの子ちゃんと見たってや。頼むで、先生」という唯1点に尽きるということです。

振り上げた拳を下ろしてもらうには、落としどころを見つけねばなりません。それがたとえ誤解によるものだとしても、挙げた拳を挙げたままでは解決しません。

どうするか。とことん聴くことです。弁解は、たとえ正当な主張だとしても、火に油を注ぐようなものです。言葉が激しければ激しいほど、その裏にある思いも深いはずです。A児の母親が、「この子ができた頃、心臓が弱かってなあ。産んだら危ない言われて、産んだんや。目の中に入れても痛くない。（そんなかわいい子なんやから、ちゃんと見たってや。頼むで、先生。…ここは口に出しては言われなかった）」と語られるまで、聴くことです。教師として言いたいこと、言わなければならないことはそれからでいいのです。

いつしか、「苦手な親」「しんどい子ども」の家庭にこそ進んで足を運ぶことを覚えました。ふらっと立ち寄って近況を伝えたり（褒める話があればさらにいいですし）、「算数の勉強、一緒にしようか」と声を掛けたり、…。結果として、拳を振り上げられる回数が減ったり、振り上げ方が小さくなったりしたような気がします。

そうした経歴を持つ私には、電話でトラブル処理をしている先生の姿が気になってなりません。「ああ、やってしまったな」と思って聞いていると、案の定、尾を引いています。

問題だと思ったら、間髪を入れず、まず家庭訪問。電話では、親の顔が見えません。ましてや、言葉の裏にある表情など感じ取れません。電話では、決してマイナスの話をしないこと。

電話口で、一方的に言われっぱなしの先生というのは滅多に見かけません。親の言葉を遮って、しっかりと自分の言い分を主張する人もいます。これが、さらにマズイ。親をヒートアップさせてどうするつもりなのでしょう。一旦こじれてしまうと、それから家庭訪問しても何倍もの時間と労力を要することになります。

電話は便利ですが、連絡の手段程度に使うことです。

本題から逸れてしまいますが…。

近ごろ、モンスター・ペアレントと言われる親がいます。親が「モンスター」であるわけがなく、そうした言葉で排除することがあってはなりません。しかし、今までの学校の「正義」が通用しない人たちがいることも事実です。

「モンスター」視されている人の多くは、地域でも保護者間でも孤立しています。頑なに生き方には、そうなった背景があるわけで、そこにメスが入らなければ関係改善の方向に向かいません。しかし、多分に一担任の努力の範囲を超えています。地域の力が欠かせません。

保護者と対等にケンカをすると、公務員である教師が100%負けます。それが、正しい主張であってもです。職員室の誰もが対応しきれないような万一の場合は、逃げることも時には必要です。くれぐれも一人で抱え込み、責任を背負わないように。子ども不在の事態で教師生命を磨り減らすのは、あまりにも無念です。